

The Great Wave

— 葛飾北斎 浮世を活写 —

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

疾風で舞い上がる高波、激流に翻弄される三隻の小舟、波濤の彼方にたたずむ富士山。静と動のほんの一瞬を見事に描き切った一枚の木版画は海外でも賞讃され、とりわけゴッホ、モネ、ドガなどフランス印象派の画家たちに衝撃を与えた。

新千円札の図柄に採用された「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」は江戸時代後期に活躍した浮世絵師・葛飾北斎（1760-1849）が70歳を過ぎて発表した。庶民の富士参詣ブームを巻き起こし、名所絵の立役者として一世を風靡する。

浮世の語源は仏教の憂き世に由来し、現世を移ろいやすく儂い世と見做した。その一方で浮世には人々の享楽を充たす世界という意味もある。題材を限定しなかった北斎は比類のない超絶技巧を駆使して浮世のすべてを描こうとした。

奇想天外な改名と引っ越し

北斎は江戸・本所割下水、現在の東京都墨田区の一部で生まれた。幼くして幕府御用達鏡磨師の養子となり、貸本屋の丁稚や木版彫刻師の徒弟などを経て「己六歳より物の形状を写す癖あり」と何よりも好きな絵の道へ進んでいく。

19歳で役者絵の大家・勝川春章の門下生となり、勝川春朗の画号で頭角をあらわす。ひそかに狩野派、琳派、土佐派などの作品を熱心に学び、唐絵や洋画も含めてあらゆる画法に精通した。

20代から30代にかけて優雅な美人画などが

評判を呼び、読本の挿絵も手掛けるようになる。とくに滝沢馬琴と組んだ『新編水滸画伝』『近世怪談霜夜之星』『椿説弓張月』などで一躍脚光を浴びた。馬琴宅に一時期居候していたこともある。



北斎肖像画・深斎英泉

神格化されていた北極星や北斗七星に憧れて北斎と名乗るようになり、40代で葛飾北斎としての名声を確立する。ちなみに画号は晩年に至るまで30回近く変更した。北斎以外に画狂人や市など奇想天外なものも少なくない。改名するたびに画号を門弟たちに売り飛ばしていたという。

改名以上に引っ越しは生涯で93回に及んだ。整理整頓がまったくできず、散らかすだけ散らかすとすぐに移り住む。当時の人名録では有名人のうち北斎だけが居所不定と記された。

礼儀作法に無頓着で人と会っても素っ気なく長話はしなかった。「おじぎ無用、みやげ無用」と張り紙に書き、まるで世間体を気にしない。

衣食住に興味がなく収入のほとんどは絵画の研究に注ぎ込んだ。人物を描くには骨格を知らな

ければ真実になりえないと接骨家に弟子入りし、
施術や筋骨の解剖学を体得する。

50代を迎えて門弟が200名を超え、指南書
となる絵手本の制作に情熱を燃やしていく。代表
作は『北斎漫画』で死後も刊行され、全巻で4千
図ほど掲載された。のちにホクサイ・スケッチと
いう名称で海外にも名声を轟かす。

ひとつの命を得たように

年を重ねても北斎の創作意欲は衰えなかった。
『東海道名所一覽』『木曾路名所一覽』を60歳
前後に相次いで刊行し、錦絵といわれた多色刷り
の木版画で新境地を切り拓く。その集大成として
70代に『富嶽三十六景』を完成させた。

錦絵は版元、絵師、彫師、摺師の連携作業で
制作され、大量生産が可能なることから庶民も廉価
で購入できる。遠近双方の多彩な視点で描かれた
富士山は十景を追加するほど飛ぶように売れた。
なかでも凱風快晴＝赤富士と神奈川沖浪裏＝波間
の富士が人気抜群で北斎風景画の代名詞となる。

19世紀中盤に開かれたパリ万国博覧会に浮世
絵も出展され、ジャポニスム＝日本様式ブームを
巻き起こす。その象徴として『富嶽三十六景』は
印象派の画家たちに絶大な影響を及ぼした。

神奈川沖浪裏に感銘を受けたゴッホは弟テオ
に宛てた手紙で「この波は爪だ。その爪に船が捉
えられている」と北斎が描いた迫真の荒波を驚異
的な爪にたとえている。作曲家のドビュッシーは
交響詩『海』初版スコアの表紙を神奈川沖浪裏の
ダイナミックな波の模写で飾った。

波の表現については北斎自身も試行錯誤を繰
り返し、並々ならぬ熱意で挑みつづけてきた。絵
手本の『北斎漫画』はもとより70代後半に上梓
した物語形式の絵本『富嶽百景』でも変幻自在
の波の表情に迫っている。同書のあとがきでは
「70歳までに描いたものは実を取るに足らぬも
のばかりだ。73歳にして、ようやく禽獣虫魚の
骨格や草木の生え具合をいささか悟ることがで
きた。だから80歳でますます腕に磨きをかけ、90
歳で奥義を究め、100歳になればまさしく神妙の
域に達すると考えている。100歳を超えれば私が
描く一点はひとつの命を得たかのように生きたも

のになるだろう」と現状に安住することなく一途
に画道を極めようとした。

みずからの決意を証明するように仕事に明け
暮れ『諸国瀧廻り』『諸国名橋奇覽』『琉球八景』
『千絵の海』『百物語』など風景画を中心に続々
と新作を発表していく。

海外では北斎への敬意を込めて神奈川沖浪裏
をThe Great Waveと呼ぶようになった。

富士山を越えて昇天する龍

晩年は浮世絵師の夫の作品をけなして離縁さ
れた娘のお栄と一緒に暮らした。お栄は葛飾応為
を襲名して家督を継ぎ、北斎も「美人画にかけて
はお栄にかなわない」と娘の才能を認めていた。
とくに「月下砧打美人図」は北斎の作品に引けを
とらない出来栄へと高く評価されている。

富士山に対する北斎のこだわりは決して絶え
ることなく「暁の富士」「松に富士」などの肉筆
画に結実する。絶筆となった『富士越龍図』は黒
雲と共に昇天する龍にみずからの一生をなぞらえ
たとわれている。全力で浮世を活写した北斎は
ついに90歳で臨終を迎えた。

法名は南隠院奇誉北斎居士。死を目前にして
「天が私の命をあと10年伸ばしてくれたら」と
眩き、しばらくして「あと5年保ってくれたら、
私も本当の絵描きになることができたのに」
と語ったという。

辞世の句は「悲と魂て ゆくきさんじや 夏の
原」。人魂になって夏の野原に気晴らしに出かけ
ようかという北斎らしい破天荒なものだった。
北斎の死後、お栄は家出をして行方不明となる。

貧乏暮らしをしていても気位の高かった北斎は
生前いかなる権力者のまえでも媚びへつらうこと
がなかった。江戸幕府第11代将軍・徳川家斉が
北斎の噂を耳にし、鷹狩りの帰りに滞在した浅草
伝法院に呼びつけて肉筆画を描かせたことがある。
将軍をまえにして北斎は恐れる気配もなく、横に
つないだ唐紙に刷毛で長く藍色を引いた。そして
持参した袋から鶏を取り出し、足を朱色に塗って
唐紙の上に解き放った。長い藍色に鶏がつけた紅
い足跡を紅葉に見立て「これ竜田川の風景なり」
と言って立ち去った。